

R. シェーファー著

シナ・チベット語族研究序説 第1部, 第2部

西田 龍雄

1. シナ・チベット語族に属する諸言語の比較研究について、これまでもつとも多くの論文を発表したのは、おそらく Robert Shafer であろう。その R. Shafer がここにまとめた著作として、本書を出版したことを、私たちは、多くの期待をもつてむかえた。本書全体の構成がどのようになっているのかは、今のところわれわれにはわからないが、既刊の第1分冊および第2分冊に含まれる章を追って項目をあげると、つぎようになる。

Part I. Chapter 1. Sino-Tibetan, 2. Prefixes, 3. Initials, 4. Vowels, 5. Final consonants, 6. Archaic west Bodish dialects, 7. Southern Bodish, 8. Central Bodish, 9. Eastern dialects, 10. Other Bodish languages, Part II. 11. West Himalayish languages, 12. West central and east Himalayish, 13. Minor groups, 14. Languages of Northern Assam, 15. Southern Kukish.

1章から5章まではシナ・チベット諸語一般の問題、6章から10章まではチベット諸語 (Bodish) の比較研究、11章から13章はヒマラヤの言語の比較、それに14章で北アッサムの言語と、15章で南クキの言語を取り上げている。

この第1分冊、第2分冊からみると、本書は Shafer がこれまでに発表して来た論文をつなぎ合わせて、その間を補足しながら、全体としてシナ・チベット比較言語研究の概略を述べようとしたらしいことがわかる。

私たちが、コトバの比較研究を対象とした書物を読むときには、おおむねつぎの諸点を問題にする。

1. 著者がコトバの比較研究自体をどのように考えているか。
2. 2つ以上のコトバを比べ合わせた data を著者はどのような立場から扱っているか。
3. 比較研究の結果あるいは結果に到達する段階で、著者は対象とする言語グループ、たとえばここで扱うシナ・チベット諸語をどのような形態をもつものと考えているか。これは共通形式の再構成の問題と Subgrouping の問題の検討になるだろう。さらに Subgrouping の問題への解答は、つぎのような具体的な基準のもとになされると思う。

3. a. 音素対応通則の適用範囲,

3. b. 形態素形式の分布範囲,

3.c. 統辞通則の適用範囲,

この中、どの基準により重点を置くかによつて、解答が違ってくるけれども、これらの3つの基準による研究が補い合うことによつて、はじめて全般的な比較研究が成立して、対象とするコトバの共通形式の再構成が可能になる。その手段として、類型的な観点から追求することも、もちろん重要な効果をもたらすであろう。

Shafer のこの書物に対して、私たちがもつとも関心をもつのは、ここに述べた第3の問題である。そして、Shafer は、いま仮に私があげた a. b. c. 3つの基準の中で、とくに a の基準に重点をおいた。b の基準は a と関連して自動的に取り上げられているほかは、とくに考慮していない。また c の統辞通則に関しては、この第1、第2分冊でみる限り、当面の問題外においている。

広い範囲を対象にした本書の全体をここで検討することは、とうていできないから、この拙文では、チベット語方言、とくに西部チベット語方言の比較研究に対する批判と、はじめの数章で扱っているシナ・チベット語族の主要言語の比較研究を中心に、議論を進めてみたい。

2. まず、第1章シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) は、総括的なこの語族の分類よりはじまる。これは、1955年、Word Vol. II. No.1 に Classification of the Sino-Tibetan languages と題して掲載した論文の修正である。その注に詳しくは上記の論文を見てほしいと書いているが、実際には本書の方が詳しい。たとえば、タイ語関係については、A.-G. Haudricourt の意見をいれて、海南島の言語や Shafer 自身の研究 (Quelque équations phonétique pour les langues Li d'Hainan, Rocznik Orientalistyczny 21. 1957. pp. 385—408) などを注記している。なお序文によると、本書の29章と30章は、タイ諸語の比較研究にあてられ、Haudricourt がそれに協力しているらしい。

R. Shafer の分類は、細部にはいろいろの問題や意見が提出されるにちがいがなく、このように全体を一つの図式に入れた功績は大きいと思う。そして、印欧語にならつて、語族 (family) に —an, Sino-Tibetan (Indo-European にあたる)、語群 (division) に —ic, Sinitic, Daic (Germanic, Celtic にあたる)、語系 (section) に —ish, Burmish, Katsinish (English, Irish にあたる) を統一的に使っている。そのほか section の下位分類として、語支 (branch)、さらにその下位グループとして unit を使う。

中国大陸を中心に、西はカシミールから東は黄海、南はマライ半島にまで及び400種類に近い言語方言を含むこの語族を、Shafer は、6つの主要語群に分ける。

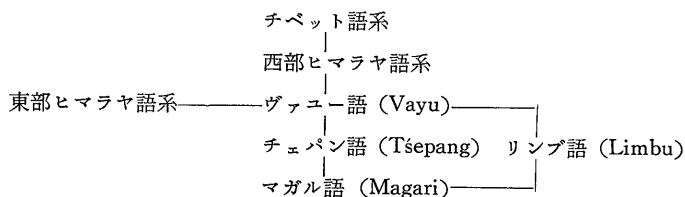
Sinitic 漢語群, Daic タイ語群, Bodic チベット語群, Burmic ビルマ語群,

Baric バラ語群, Karenic カレン語群

この6語群の分類は、カレン語群を含めているほかは、ほぼ通説に従つて隠当ではあるが、既発表のどの分類とも一致しない。たとえば中国の研究者の分け方ともかなり異つてゐる。岑麒祥編著『語言学史概要』に例をとると、漢蔵語系は、1)漢語族、2)泰語族、3)蔵緬語族、4)苗瑤語族、5)越南語和葉尼塞・奧斯提亜克語(ベトナム語とエニセイ・オスチャック語)に分けられている。この5)は別として、1, 2, 3, 4 は大体中国の学者の統一的な分類法である。

ここで Shafer のこの語群の分類根拠について検討する意図はないが、これらの語群の下位グループを、たとえばチベット語群をどのように分けているか、そしてその中、チベット語系をどのように見ているかを一応紹介しておく必要がある。まずチベット語群は、はつきり分類できないネワール語 (Newarish), デイガル語 (Digarish) を除いて、つぎの4つの語系にわけらる。

1. チベット語系 (Bodish Section), 2. 西部ヒマラヤ語系 (West Himalayish Section), 3. 西・中央部ヒマラヤ語系 (West Central Himalayish Section), 4. 東部ヒマラヤ語系 (East Himalayish Section). これらの語系の親縁関係をつぎのように図示する。



ヴァユー語、チエパン語、マガル語は西・中央部ヒマラヤ語系の言語であり、リンブ語は東部ヒマラヤ語系の変形言語である。

従来ヒマラヤの諸言語は、Sten Konow の分類にしたがつて、Non-pronominalized dialect (非代名詞化方言) と Pronominalized dialect (代名詞化方言) にわけるのが普通であつた (Grierson *L.S.I.* Vol. I. pt. I. Vol. III. pt. I)。これを Shafer は改めて、前者の中、グルン語 (Gurung), ムルミ語 (Murmī), タクシャ語 (Thakhsya) を、古代チベット語とかなり近いことから、つぎに述べるチベット語系のグルン語支に入れ、スンワール語 (Sunwāri) とマガル語は東部ヒマラヤ語系に、ネワール語は所属不詳の Minor group に、レプチャ語はビルマ語群クッキー語系の北部ナガ語支に属させた。

これらの分類とその根拠は、1950年に発表した *Classification of some languages of the Himalayas*, (J. Bihar R.S. Vol. XXXVI pts. 3-4) で論じ、レプチャ語については、*The Naga branches of Kukish, Vocalism* (Rocznik Orientalistyczny Tom XVI 1953) でふれている。

つぎに、この4つの語系の中、はじめのチベット語系の分類をみよう。これも4つの語支に分かれる。

1. チベット語支 (Bodish Branch)
2. ツァン・ラ語支 (Tsang la Branch)
3. ジャロン語支 (Rgyarong Branch)
4. グルン語支 (Gurung Branch)

1はさらに、i) 西部チベット諸語 (West Bodish unit) バルティール語、プーリック語、ラダック語など、ii) 中央部チベット諸語 (Central Bodish unit) ツァン (gTsang), ウー (dBu), アンパ (āba), チョニ (Choni), ニャロン (Nyarong), アムド (Amdo), カム (Kham) など、iii) 南部チベット諸語 (South Bodish unit) ジョ・モ・ワ (Gromo=Tromowa), デンジョーン・ケー (Dändzong Kä), iv) 東部チベット諸語 (East Bodish unit) タクパ (Dwags=Takpa) の4つに分かれる。

これは、非常に大胆な結論ではあるが、Shafer にしたがうと、チベット語系の系統図は、つぎの頁のようになる。(p. 113)

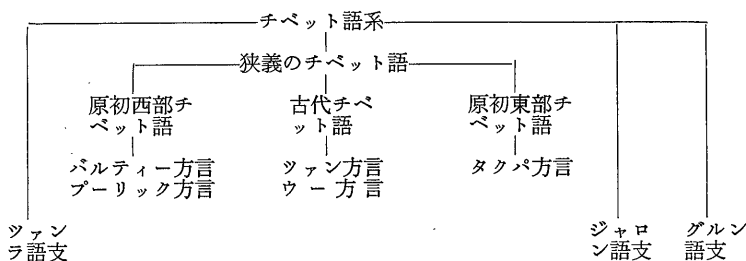
チベット方言

Roerich (1931)

Uray (1949)

1. Dialects of Western Tibet
(Balti, Purig, Ladakī)
2. Dialects of Central Tibet
(ü, Tsang)
3. Dialects of Southern Tibet
(To-mo or chumbi, various
Himālayan dialects)
4. Dialects of Eastern and South-
Eastern Tibet.
(Khams, Chamdo, Derge, Amdo,
Pa-nag, Li-thang, Tsarong)
5. The archaic nomad dialects
(Amdo, Nya-rong, Go-log, Hor-ke
etc.)

1. Western Tibetan group
(Balti, Purik, Sham)
2. Central Tibetan group
(Leh, Rong, Kagate, Sharpa, Ü
Tsang)
3. Southern Tibetan group
(Dänjonkä, Lhoke)
4. Eastern Tibetan group
(Tzū-ku, Ta-tsien-lu, Ngan-Shun-
Kuan, word-lists of Prževalskij,
Széchenyi)



上にあげた南部チベット諸語は、ここでは明記されていないが、これはツェン方言、ウー方言と並んで古代チベット語の系統と考えている。

チベット語の方言分類は、これまでに数人の研究者によつて試みられているが、それぞれの意見と根拠がはつきりしているものから漠然としたものまであつて、すべてを対照しても収拾がつかない。いま代表的な分類として、Roerich (1931)²⁾、Uray (1949, 55)³⁾ と瞿霏堂 (1963)⁴⁾ の結論のみを参考のためにあげておこう。

分 類 対 照 表		
Uray (1955)	瞿霏堂(1963)	Shafer (1966)
A. Western Archaic group (Balti, Purik)	(中国国内のチベット語に限る)	1. West Bodish Unit (Balti, Purik, Ladakhi, Lahul)
B. Western Transitional dialects a) Ladakhī (Leh Rong) b) Sham		2. Central Bodish Unit (Lhoke, Śarpa, Kagate, gtsang, dbu, Batang, Tatsienlu, Anshuenkuan, Panag, Nyarong, Amdo, Khams, etc.)
C. Central group a) Central Subgroup (Lahul, Kāgate, Ū, Tsang) b) Southern Subgroup (Dänjonkä, Lhoke)	1. 衛藏方言 前藏(Ū) 後藏(Tsang)	3. South Bodish Unit (Tromowa, Dandzongka)
D. South Eastern group (Tzū-ku, Ta-chien-lu, Derge)	2. 康方言 (Khams)	4. East Bodish Unit (Dwags (Takpa))
E. North Eastern dialects a) Dialects connected with the South Eastern group a) An-shuen-kuan b) Prževalskij's, Széchenyi's word-lists b) Dialects connected with the central subgroup Khams, recorded by Jäschke c) dPa-ri dialect, recorded by Hermann d) Ch'ing-hai dialect, recorded by Prževalskij	昌都, 甘孜(四川), 迪庆(雲南)玉樹(青海)各自治州 3. 安多方言 (Amdo) 阿壩(四川), 甘肅, 青海の藏族自治州, 自治県ほか	

3. Shafer は、西部チベット諸語についてつぎのように云う。“現在話されているチベット語諸方言の中で、もつとも古いのは西部チベットのバルティー語である。いま一つの西部チベットの方言であるプーリック語は、おそらく中央部チベットのカムス方言とならんで、その次に古い方言としてランクされるだろう。”、そして上に図式をあげたように、Shafer は中央部の方言は古代チベット語から来源したが、西部の諸方言は、それとは違つた原初西部チベット語から来源したと考える。

西部チベット語方言の比較研究は、チベット語研究者の間で、早くから出来ていた。はじめにハンガリーの Uray が「東部チベット諸方言の分類」において、他の方言との比較資料を提供し (1949)、ついでアメリカの R.A. Miller が「ラダック方言の通時音韻論」(1956)⁵⁾ で WT(Written Tibetan) に対して、PWT(Proto-Western Tibetan) 形式をかなりの単語について再構成した。私も手許にその原稿をもち、その一部を丙種本西番館訳語の研究と関連して発表した(「十六世紀における西康省チベット語天全方言について」京大文学部研究紀要7, 1963)。ハンガリーの Róna-Tas はモンゴル語に借用されたチベット語の研究 *Tibeto-Mongolica* の中で⁶⁾、西部チベット語の対応形式を随処にあげた(1966) [序文によると、この書物のハンガリー語の原稿は60年に、英訳は63年に出来たとある]。最後にこの Shafer の仕事がまとまつた体裁で発表された (1966)。ここで強調したいのは、これら数人の研究は、いずれも同一の資料にもとづいている点である。バルティー語は、H.F.C. Read の *Balti Grammar*, London 1934, プーリック語は、T.G. Bailey の *Linguistic studies from Himalayas*, London 1920. pp. 1—45 によつている。これ以外のよく知られている資料としては *Linguistic Survey of India* Vol. III. pt. I ぐらいに限られる。それ故、問題は、数人の研究者が同じ資料を使つてどのような違つた結果を出しているかにある。本書で Shafer が提出している成果は、接頭辞: *g-, *d-, *b-, *br-, *r-, *l-, *s-, *m-; 初頭子音: 無声無気音, 無声出気音, 有声閉鎖音, 有声破擦音, 有声摩擦音と y について、合計14種の比較表の形をとつてまとめられている。まず接頭辞 *g- および *d- について、Shafer はつぎの対応原則をたてる。

[古代チベット語]

O.B. g-接頭辞>バルティー x-: (s のほか)無声初頭音 (と鼻音?) の前で

> “ r-: (鼻音以外の?) 有声音の前で

g-接頭辞>プーリック r-: (鼻音以外の?) 有声音の前で、ただし摩擦音の前では脱落

O.B. d-接頭辞>バルティー i-: 無声軟口蓋音の前で

r-: 有声軟口蓋音の前で

O.B. d-接頭辞>プーリック s-, ś-: 無声音と鼻音の前で

r-: 有声軟口蓋音の前で, (鼻音以外の 有声唇音の前では z-)

実際には, この原則に対する例外的な対応があつて, O.B. d-: Balti ɪ- には, “唇音の前では, パルティー語の初頭音が無声音であれば, この接頭辞は, おそらく ɪ と摩擦音 (x, s) の間のどれか一つの音素になつた” の条件がついている。これは, O.B. dpyid: Balti xpit-u “spring”, O.B. dpral-ba: Balt. spal-: Purig spral “forehead” があるためであるが, この対応関係は, 唇音の前のみではなく, 軟口蓋音の前にも認められ, 初頭有声音の場合にも並行した現象がある⁷⁾。

	O.B.	Balti	Purig
“center”	dkyil-ma	skil-	shkil
“to stop”	dgag-pa	zgaq-pa	?

もし, Shafer のように, 原初西部チベット語の存在を仮定し, それが中央部の古代チベット語形と違つた形式をもつたとするならば, このような対応関係を示す単語には, それぞれ西部チベット共通形として, *dpyid-, *spral-ma, *skil-ma, *sgag-pa を再構成すべきであると思う。

またチベット語では, 接頭辞 g- は, 語幹初頭子音 c-, ts-, t-, d-, zh-, sh-, z-, s-, y-, ny-, n- の前に, d- は, k-, p-, g-, b-, ŋ-, m- の前にのみあらわれて互に補い合う関係にたつているから, この2つは古代チベット語のある時期で音素論的には同じ単位であつたことになる。Shaferはこの点についての配慮に欠けている。ここで接頭辞と称している要素の比較研究は, O.B. の形式と西部チベット語方言形式の間に認められる個々の要素の対応関係ではなくて, 全体システム間の対応あるいはシステム間の変転関係としてとらえるべきであると思う。

私は O.B., Balti, Purig 語のいわゆる接頭辞の対応関係をつぎのように考えた

I	O.B.	g-~d-	b-	m-	h-	r-	l-	s-
II	Balti	x-	ph-	○	○	hr-	hl-	s- (before voiceless initials)
		ɣ-	b-	○	○	r-	l-	z- (before voiced initials)
III	Purig	○	○	○	○	hr-	hl-	s- (before voiceless initials)
		○	b-	○	○	r-	l-	z- (before voiced initials)

この I, II, III, は, 3つの変転段階 stage I → II → III を代表していると考え

て差支えがない。パルティー語では, 初頭音の無声か有聲かの条件で g-~d- は x-ɣ- < *kh- g- になり, b- は ph- b- になつた。この4つはプーリック語では有声初頭音の前で b- がのこるほかすべて脱落した。m- h- はパルティー, プーリック共になくなり (ただし m- は複合単語で保存される), r-, l-, s- はいずれも無声, 有声の初頭子音の性質に応じて, 無声音または有声音の形でのこつた。

古代チベット語 (O.B.) もある時期で、接頭辞に有声音と無声音の2系列をもつていたことは十分に推測できる。中央のチベット語の祖先も西部のチベット語の祖先も接頭辞のシステム自体にはさほど相違はなかつた。ただ個々の単語形式にそのシステムの中のどのメンバーをあたえるかは、両者の間で必ずしも一致しなかつた。これはその接頭辞のもつ意味とか機能と関係している。中央チベット語で [g~d-] をもつ形式に、西部のチベット語では s- をつけたことも当然考え得る。このような場合、[g~d-]:s- の音素対応通則をたてることは、共通形式の設定に対しては無意味であるように思われる。(上掲 dpyid- 以外の例)。この立場から見れば“プーリック語の llcin “urine” は Bailey の記述が正しければ O.B. gcin “urine” と lci-ba “dung” から作られた hybrid 形式であるようだ”という Shafer の考えはあたらない。たしかにプーリック語の “urine” llcin, “to urinate” llcintañcäs は、中央チベット語の cim-pa と cim-pa tang-wa, 書写語の gcin-pa, gcin-pa gtang-pa に単語形式は対応するが⁸⁾、これを O.B. g-:Purig ll- としない lci-ba との混合形式として扱う必要はない。これはバルティー語の khchin, khchin tangma に対して、プーリック語では l-接頭辞を採用したためであり、これと並行する “to squeeze” O.B. gcud-pa; Bal. khchu-wa: Pur, llcücäs の例も同じように解釈できる。

接頭辞 s- はバルティー語プーリック語共に、無声音と鼻音の前で s-, 鼻音以外の有声音の前では z- である。ただ “to sneeze” O.B. sb rid-pa: Balt. zbit-, “snake” sbrul: Bal. ɣbul のように s-+閉鎖音のあとで -r- は脱落するから, “fable” O.B. sgruñs に対するバルティー語 zdruñ はバルティーの Subdialect 形であるという (p. 81) のは同意し難い。これと並行する例として, “to roll” O.B. sgril-ba: Bal. zdril-ba(intr. ril-ba) があり, 同じ比較表の中で Shafer があげているのに, “fly, bee” O.B. sbrañ-bu: Bal. zbyañ-bu があるから, Subdialect 形式とは断言できない。

また接頭辞 m- は一般に脱落するが、複合語で母音のあとにつづく場合は保存されるという (p. 82)。

O.B. kha-mchu	“lip, beak”	O.B.(sna-)mtshul-pa	“nose, muzzle”
Balt. khamchu	“ ”	Balt. snam-sul	“nostril”
Purig khamchū	“ ”	Purig snam-tshul	“nose”

これは、西部チベット語のみの現象ではもちろんない。金鵬にしたがうと、ラサ方言にも同様にこの m- の保存は顕著である。

bcad mtshams	tɕe¹ mtshan¹	“判 決”
ya mtshan-po	ja³ mtshen¹ po¹	“奇 怪 な”
sku mched	ku¹ mtɕhe¹	“兄弟姉妹”
kha mchu	kha¹ mtɕhu¹	“訴 訟”

(金鵬『藏語拉薩日喀則昌都話の比較研究』p. 5)。この点は、単独形でも m- や h- にあたる形を保存するカム方言やアムド方言の方がより古い形をもっている
と云えそうである。

ex. O.B. mkhar: Balt. khar: Amdo mkhar: Khams mkhar “castle”
mgo : go : mgo : mgo “head”
mda : da : mda : mda “arrow”

初頭子音については、Shafer はつぎのような通則を考える。

1. 無声無気音はバルティー・プーリック語で保存されるが、O.B. の #p- には
バルティー語で b- があたる。

	O.B.		Balt.		Purig
“brick”	pag	:	bak		x
“skin”	pags-pa	:	baxs		-špaxs
“knee”	pus-mo	:	bux-mo		puks-mo

この事実を Shafer は、バルティー語で *p- から b- へ変つたのだとする。
(cf. 拙稿「チベット・ビルマ語語彙比較における問題」『東方学』15輯, 1957
p. 51- Róna-Tas, 1966 p. 177)

2. 初頭出気音は一般にバルティー・プーリック語で保存される。この通則に
例外になつている多くはバルティー語であり、その大部分は誤りによるのだろう
という。しかし、Shafer があげていない軟口蓋音の例もあつて、必ずしも誤り
とは云えない。

	O.B.	Balt.	Purig		O.B.	Balt.
“needle”	khab	kaḥ	khap:	“to wrap”	ḥkhril-ba	hrkil-ba

3. 有声初頭音はつぎのような関係になる。

接頭辞+有声音 : Balt. 有 声 音 : Purig 有 声 音
有声音 : 有声～無声 : 有声～無声

dr- はバルティー語で tr-~thr-, プーリック語で tr-dr- になる。この tr- は古
代チベット語よりも原初的な段階を代表しているのではないかと疑えるが、この
問題は、有聲出気音と無聲音を区別でき、声調を記録できる人によつて作られた
西部チベット方言の報告がない限り、はつきりと決定できないという (p. 84)。

[補注1]

実際には有声初頭音は、接頭辞の有無に拘らず同じ対応関係をもつていて、私
の資料でもつと明瞭にこの事実を示すつぎようになる。

i) O.B. voiced: Balt. voiced: Purig voiced

“to put on”	gon-pa	gonchas	guncā
“grape”	rgun	rgun	rgun
“to sit”	ḥdug-pa	duk-pa	duk-cas
“hole”	do	do	x
“cow”	ba	ba	ba

- | | | | | |
|------|---|----------|------------------|----------|
| | “cock” | bya-pho | bya-pho | biā |
| ii) | O.B. voiced : Balt. voiceless aspirated : Purig vl. asp.(?) | | | |
| | “wheat” | gro | khro | |
| | “to untie” | hgrol-ba | khrol-ba | ? |
| | “smoke” | dud-pa | thud-pa | ? |
| | “to join” | sdud-pa | thud-pa | thut cas |
| iii) | O.B. Voiced : Balt. vl. unasp. : Purig vl. unasp. | | | |
| | “to bend” | gug | kuk-pa | ? |
| | “to shake” | sgul-ba | skul-ba | ? |
| | “smell” | dri | tri | trih |
| | “dirt” | dre-ma | tri-ma | tri-ma |
| iv) | O.B. gl- : Balt. hl-, <u>kh</u> l- : Purig ll- | | | |
| | “song” | glu | hlu | llū |
| | “lightning” | glog | hloq | lloq |
| | “bull” | gla | <u>kh</u> la | -lla |
| | “brain” | glad-pa | <u>kh</u> lad-pa | x |
| v) | O.B. bl- : Balt. l- : Purig ? | | | |
| | “monk” | bla-ma | la-ma | ? |
| | “to get up” | bla-pa | la(s)-ma | ? |

4. 有声破擦音として, Shafer はつぎの対応関係をあげる。O.B. dž-: Balt. dž-: Purig ž-; O.B. brdž-: Balt. bž-: Purig rdž-(?); O.B. dz-: Balt. dz-: Purig z- しかし, 実際にはこのほかに i) O.B. の hj (= hdž): Balt. phsh-: Purig sh, ii) O.B. hj-: Balt. ch-: Purig c-, iii) O.B. dz-: Balt. z-: Purig z- の対応がある。

- | | | |
|------|--------------|---|
| i) | “to destroy” | <u>h</u> jig-pa : Balt. phshik-pa : Purig <u>sh</u> i khcas |
| | “to efface” | <u>h</u> joq-pa : phshik-pa ? |
| | “to rinse” | <u>h</u> jal-ba : phshal tangma ? |
| ii) | “to allow” | <u>h</u> jug-pa : chuk-pa : cukcas |
| iii) | “to smile” | <u>h</u> dzum : rzum bya ? |
| | “false” | rdzun : gzon : zon |

5. 有声摩擦音 ž, z と y はそのまま保存される。

このほか初頭音 l-, r-, ’-, g-, m-, n-, ny- の対応はあげられていないし, ここでふれていない O.B. sl-, zl-: Balt. lz- の Metathesis⁹⁾や O.B. sr-: Balt. str-: Purig str-¹⁰⁾ の対応なども重要であると思う。

R. Shafer が, 原初西部チベット語の存在を仮定しながら, その形式の設定よりも, 中央部チベット語との対応関係の設定により注目しているのが, 私には理

解できない。バルティー語、プーリック語に見られる中央部チベット語との相違点は、多くの場合、西部チベット語の古い形式を反映していると見てよいのではないだろうか。たとえば、つぎのような諸例で、

- | | | | | | |
|----|------------------------|---|-----------------------|---|---------------|
| 1) | Wr.T. skud-pa “thread” | : | Balti skud | : | Purig skud-pa |
| | skad “language” | : | skat | : | skat |
| 2) | skas-ka “ladder” | : | kas-ka | : | kas-ka |
| 3) | dkon-pa “costly” | : | hrkon-mo | | |
| | dpe “pattern” | : | hrpe bya “to imitate” | | |
| 4) | dkar-ba “white” | : | kar-po | : | kar-po |
| 5) | rmaḡ “foundation” | : | hrmangdo | | |
| | dmaḡ “army” | : | hrmaḡ | | |
| 6) | dmar-po “red” | : | mār-po | : | mar-po |

1 対 2, 3 対 4, 5 対 6 に認められるバルティー形式の相違は、何を意味するのだろうか、単に記録の誤りであろうか、あるいは西部方言の古い段階での区別を反映しているのか、今の状態では決定できない。ただ初頭鼻音の hr- と m- はあるいは無声音 [m̥] と有声音 [m] の対立を示している可能性は考えられる。

西部方言バルティー語とプーリック語についての Shafer の扱いは、音素対応規則、しかも接頭辞と初頭音についての規則を求める点にとどまった。しかし、この方言にはまだまだ検討すべき特徴が多くのごついている。いま、二、三重要な事実を指摘しておきたい。

チベット語に顕著な接尾辞が、開音節語幹につく場合に、先行の母音と結合して、一音節になり、前舌母音 -i, -e のときには -ya- に、後舌母音 u, -o のときには -wa となる特徴がバルティー方言にある。そして動詞語幹であれば、その命令形が本来の形式を示すことになる。

	Wr.T.		Balti (infinitive)		(imperative)
“to count”	rtsi-ba	:	hrtsya		hrtsis
“to ask”	dri-ba	:	trya		tris
“to die”	hchi-ba	:	shya		shis
“to open”	hbye-ba	:	phya		phes
“to play”	rtse-ba	:	hrtsya		hrtses
“to steal”	rku-ba	:	hrkwa		hrkus
“to wash”	hkhru-ba	:	khruwa		khru
“to cry”	ṅu-ba	:	ṅwa		ṅus
“to distribute”	bgo-ba	:	bgwa		bgos
“to build”	bco-ba	:	phchwa		phchos
“to hear”	go-ba	:	kwa		kos

“to dig” rko-ba : hrkwa hrkos

名詞語幹に認められる同一現象も、-u-ba, -o-ba からの変化によるものと解釈できる。

dbu-ba “foam” : zbwa <*zbu-ba
glo-ba “lungs” : hlwa <*hlo-ba
lto-ba “stomach” : hltwa <*hlto-ba

この対応関係はいくつかの重要な意味をもっている。その一つは、チベット書写語のいわゆる Wa-zur と関係する。Wa-zur についてはこれまでにいろいろの意見が述べられたが、上掲の対応例からみると、バルティー語がたどつた変化が中央部チベット語にも、ある時期にあらわれた結果であると見て妥当ではないだろう。rtswa “grass” は rtsu-ba あるいは rtso-ba からの変化形であり (Balt. hrtswa), rwa “horn” は ru-ba からの (Balt. rwa), tshwa “salt” は tsho-ba または tshu-ba からの, shwa “blood” は shu-ba または sho-ba からの変化形式であると考えて差支えないと思う。

書写語の -eC にバルティー方言の -yaC が対応するのも大きい特徴と云える。

“hope” Wr.T. blo-gdeg : Balt. γdyang-ma
“patience” Wr.T. theg-po : thyaq-po
“good” Wr.T. legs-mo : lyakh-mo
“to touch” Wr.T. reg-pa : ryakh(s)-pa “to begin”(?)

これは書写語の -e- 母音の一部に -ya- から来源した形式を含むことと古代チベット語では、歯茎音や l, r- も -ya- と結合したことを示している。(cf. p. 013)

4. つぎに今一つの西部方言、ラダック方言に移ろう。Shafer は O.B. と Balt. : Purig の関係を一方で考え、他方で O.B. とラダック方言の対応をとり上げた。しかし、バルティー、プーリックとラダックの関係は問題にしておらず、いま一つのラフル方言も比較の対象から除いている。西部チベットの代表的な4つの方言を、Balti/Purig→Ladwag→Lahul または Balti→Purig→Ladwag→Lahul と並べて、その発展過程を代表していると見るのが普通である。ラダックの方言には西から東に向つて Sham, Leh, Rong と三種があり、西の方によるほど古い形式を保っている。L.S.I. (Vol. III. pt. I) によつてその形をあげると、

“box” Sham sgam Leh Gham Rong Gham : Balt. rgam
“dry” skampo skampo hampo : skambo
“child” phrugu thrugu thrugu : phru

それ故、さきに掲げた方言分類で、Uray は (1955) では共に Western transitional dialects としているが、(1949) では Sham を西部チベット群に、あと

の2つを中央部チベット群に入れた。発展過程を書き改めると、Balti→Purig→Ladwag (Sham)→(Leh)→(Rong)→Lahul となる。

Leh 方言の研究を発表した R.A. Miller によると、Ladwag の話し手は、Balti 方言をはじめて聞いても理解でき、Purig 方言の話し手は Ladwag と Balti 方言を共に理解できる。Ladwag 方言と Balti 方言の話し手は、Purig 方言を理解できるが、Balti 方言の話し手は、Ladwag 方言を理解し難いと云う。

(ZDMG. 1956. p. 345) 右のような関係になる。もし、Sham 方言の話し手であれば、すべての関係が成立するであろう。



Shafer は、Francke(Leh), Jäschke(Sham), Sandberg (Leh?) の資料を使つて、2つの対照表を掲げ、いくつかの音素対応通則を設定する。しかし Shafer はA語とB語を比較するのに、A語のシステムもB語のシステムも考えない。少くとも表面には出さない。A語の任意の単位を選んでB語の任意の単位に比べる。したがつて、ここではラダック方言の音素体系は、読者にはまったく明らかではない。

5. Shafer が原初東部チベット語から来源したとする唯一の方言タクパ(Dwags=Takpa) 方言とは如何なる特徴をもっているのだろうか。Shafer はタクパの音声特徴 (phonetic features) は、古代チベット語よりも、より古いと考えている。たとえばタクパの wa “tooth” は古代チベット語の so から来たことはあり得ず、その共通形式 *swa (Bur. swa) から来たのだと云う。またタクパは、O.B. bži < *bži が失つた *l を pli “4” で保存する点でも古代チベット語よりも古いと云う。その上、Shaferは、自分をはじめて古代チベット語を学んだとき、軟口蓋と両唇閉鎖音と歯茎鼻音は -y- の前に来るが、歯茎閉鎖音は来ないので *ty が ts に、*thy が tsh に、*dy が dz になつたのではないかと疑つたが、それがタクパ方言によつて実証されたと云う。またタクパの古い音声特徴は、タクパの北東地域で話されるジャロン語と並行するとも云い、つぎの例をあげる。

	Dwags	Rgyarong	O.B.
“tooth”	wa	swe	so
“4”	pli	-pli	bži
“1”	thi	ke-tiak’	gtśig
“great”	then-bo	-kt’i	tśhen-po
“7”	nis	-śnis	x

タクパ方言はもちろん基本的にはチベット書写法とちやんとした対応関係をもっている。それを Initials, Final consonants, Medial consonants, Prefixed consonants, Final vowels, Medial vowels について論じている(pp. 112—116)。

Shafer は B.H. Hodgson の *Sifán and Hórsók Vocabularies* によつているが、貧弱な資料からよくこの方言の特徴をつかまえている。ただ資料そのものの不正確さから来るあいまいさは否定できない。私は、タクパ方言は、原初東部チベット語を代表しているものではなくて、チベット語を基本としないから、ビルマ語的な特徴をかなりもつた link languages の一つと考えたい。ビルマ語形との対応は上掲のほか、つぎの数語がある。

	O. Bodish	Dwags	Bur.
“6”	drug	kro	khro̥k
“snake”	sbrul	mrui	mrwe<mruy
“arrow”	mda	mla	hmra ²

(cf. Bur. “one” tac. “seven” khuhnac)

なお、Shafer は 1954年に The Linguistic position of Dwags, Oriens 7. を発表している(未見)。

6. Shafer が狭義のチベット語から分離するコトバに今一つ Tsangla がある。

このコトバも音声特徴分析 (analysis of its phonetics) をするのに十分なほど記録されていないと云う。そして、このコトバは一見、接頭辞を失つていること、両唇閉鎖音と前舌母音の間で -y- を失うこと、末尾閉鎖音を無声音にすること、末尾の -s を失う点で、近代チベット諸方言と似ていて、読者はツェンラ方言は古代チベット語の伝承形であるとの印象を受けるだろうけれども、事実はそのうちではない。これは、おそらく、古代チベット語に系譜的にもつとも近い別のコトバから来ている。ただこのコトバはチベット語の方言から多くの借用語をいろいろの時期に借り入れたことが確かであるところが厄介であるという。Shafer はまずツェンラ方言とチベット書写語の比較語彙64語をあげつぎにツェンラで閉鎖音 + r が保存されるが音声変化をおこしている例を5語示している。

“rope” do. i.e., ḍo(O.B. sgrogs), “boat” dru (O.B. gru)

“box” drum (O.B. sgrom), “write” dri (O.B. bris(pf.))

“bridle” sap (O.B. srab),

この変化は近代チベット語の特徴であるから、これらの単語はおそらく(中央部)チベット語からの借用語であろうと推測する。しかし、一方で近代チベット語形に対応しないし、近代チベット方言的な音声変化をもたない単語もある。

“four” Tsa. phyi, phi : O.B. bží “bear” Tsa. om-śa : O.B. d-om

“tongue” le : ltše “field” a-riñ : žiñ

“moon” la-nyi : zla-ba

さらにチベット語的でない語根もあると云う。

“thin” ba-lo, “shoot” gap, “bow” li

“thou” na “water” ri
 “listen” na “stone” luñ

この中 “shoot” は O.B. rgyab にあたると考えられるが、そのほかの形には、対応するビルマ語形をあげることができる。

“thin” pa²-de, “thou” nag, “listen” na²-de,
 “water” riy, “stone” klo²k, “bow” liy²

私は、このコトバもとくに他のチベット語と別系列とはしないで、タクパなどと同じくビルマ語的な性格を示す一派として扱うべきであると思う。あるいはこの方言におけるチベット語との顕著な類似はすべて借用によるものであつたかも知れない。本来ビルマ系民族がチベット族との接触から大量にチベット語を借り入れて変容した可能性も弱くない。私は今の段階では、Shafer のタクパ語やツァンラ語の分類に強いて異をたてる気持はないが、チベット語とビルマ語のはしわたし言語として、これらを評価しなおす面が十分にあることを指摘したい。そして、このような性格を、もつとも顕著に出しているものは、今まで発表された資料の中では、A.H. Francke の Manchad 語であると思う。Shafer はこれを (Mantsati), 西部ヒマラヤ語系の北西部語支に入れているが、このコトバも全般的にチベット語と類似した形式をもちながら (これが借用語である場合も多い)、ビルマ語と非常に近い語形を少なからず含んでいる。いま私の比較資料から数語をあげてみる。

	Manchad	Tibetan	Burmese
“hundert”	rā	brgya	ra<rya
“acht”	re	brgyad	hrac
“Feld”	rhi	gzhi	mrei<mriy
“Tag”	rhag	zhag	a-rak
“Pferd”	rhañ	rta	mrañ ²
“Stein”	rhag	rdo	kyok<klok
“Hund”	khui	khyi	khwei ² <khuy ²
“Blut”	shui	khrag, shwa	swei ² <suy ²
“sprechen”	pra-i	x	pro ² -de
“Wasser”	ti	chu	rei<riy
“schwer”	lhi-(i)	lci-ba	lei<liy
“Zunge”	lhe	lce	hlya

Shafer のように単語形式を列举し、音素対応の通則を求めることも必要ではあるが、チベット語系とビルマ語系の接触という面から、これらの言語群を考えなおすべきであると思う¹³⁾。事実西ヒマラヤのマンチャッドとかカナウリーの中にビルマ語に近似した形式が保存されているのは、極めて興味のある重要な事柄で

あり、チベット語群とビルマ語群の親属関係を証明するための一つの出発点でもある。今後に残された問題は多い。

Shaferのチベット語諸方言の比較研究は、かなり大雑把なものであり、現在利用できる資料、とくに信頼できる資料をすべて使っていないところに大きい欠点がある。しかも、システムを中心としないで断片的に音素対応の通則を求めている比較の方法に多くの不満があるけれども、チベット語方言全般にわたった概観をはじめて与えた功績は少なくない。

7. シナ・チベット語族の比較言語的研究は、まだ出発点にある。ここ数十年来、そこから大きくふみ切ることができないでいる。このように発展をこぼんでいるのは、対象自体のむつかしさ、複雑さにあるのだろうか。それとも資料の不足と比較の方法に大きい不備があるためだろうか。今の段階では、この語族の2大古典語である漢語とチベット語の間の関係もうまく証明されるとは考え難い。この解決へよりよい見通しあるいは希望をもたらすためには、まず各語群の成員間の関係を解明しなければならない。文献学的な知識の上にたつた、しかも現在諸方言における反映形式に支持された各語群の歴史の考察に先決すべき問題がある。そして語群から語派の証明に進み、チベット・ビルマ語派とシナ・タイ語派の設定に向わねばならない。この2語派の設計が初めに出来なければ、この語族の成立もあぶない。しかし性急な研究者もいて、漢語、チベット語、ビルマ語などの漢蔵語族のみではなく、クメール語、インドネシア語なども多く介入させ事態をより混乱させようとする。そこで証明できるのは、せいぜい各語群各語系内部の関係にすぎないのに。このような方向への誘導はまだまだつつしむべきであると思う。

さて、ここで本書第1章～5章にかえつて、Shaferが語群間の比較研究を如何に扱っているかを検討してみたい。

Shafer はつぎのように云う。

比較文法の多くの部分は、資料が十分であれば位置ごとの音声対応(positional phonetic equations) をあとづけることと、環境による音声対応を記録することで占められるだろう。もし音声上の問題のすべてを解決できたとすると、シナ・チベット語族の比較文法でのこる問題は少くない。しかし、まともな音声対応(strict phonetic equations) のほかに別の音声上の諸問題がある。それは形態音素論的な変形(morphophonemic shifts)あるいは音声交替(phonetic alternation)がおこっているからである。そして印欧語比較文法における母音交替に似たものがあつて、印欧語では母音だけに限られるが、漢蔵語族では、母音の形態音素論的な変形と子音の形態調和変形(morphosymphonic shifts (of consonants))がある。(p. 13)

母音交替はどのコトバにもはや機能していないようであり、比較資料からのみわかる。シナ・チベット語族の形態音素論の変形は、多くの点でサンスクリットの短かい i と u 系列に似ているという。Shafer の主張する交替系列とその例を表にすると、つぎのようになる。

low grade	guṇa	vr̥ddhi	samprasāraṇa	
i	e	ai	ya	
u	o	au	wa	
ex. Luśei	ni	O.B. ne		“aunt”
		O.B. nye-ba	L. nai	“near”
O.B.	mig		Bur. myak	“eye”
Bur.	'a-me<*-mi	'ä-mi<*-me	'ä-may	“mother”

Shafer はこのタイプの比較を出来るだけ避けたが、この特徴が無視されるならば、シナ・チベット比較文法の正確な見方は与えられないことになるといつて、つぎのような例をさらに追加している。

- { O.B. buñ-ba “humming and stinging insects.” (low grade)
- { O.B. bon-bu ”(certain) insects” (guṇa)
- { Ch. 祺 gyi- “happiness” (low grade)
- { O.B. dge-ba “ ” ” (guṇa)
- { Ch. 飢 kyi- “hungry” (l.)
- { O.B. bkres-pa “ ” ” (guṇa)

[p. 76 table 25 では O.B. bkres-pa に饑 kyei- をあてているのは、漢語の guṇa₁ 階梯の対応形を掲げたことになる。]

- { Ch. 涸 tek “a drop, to drop” (guṇa)
- { O.B. gtigs, gtig “to drop” (low grade)
- { Ch. 起 k'yi/ “to raise” (low grade)
- { Bur. k'yi<*k'ye “ ” ” (guṇa)
- { Ch. 念 nem “to think” (guṇa)
- { Ch. 恁 nyam “ ” ” (samprasāraṇa)
- { O.B. snyan “ ” ” (s.)
- { O.B. t'u “spittle” (low grade)
- { Ch. 音 t'u/ “to spit out” (l.)
- { O.B. t'o-le “ ” ” (g.)
- { Ch. 吐 t'o\ “to spit out” (g.)
- { Ch. 唾 t'wa\ “to spit, saliva” (s.)
- { Ch. 舌 dźit “tongue” <ldźit (low grade)
- { Siam lñ², Lao lñ (l.)

{	Ka. sin-let, Magari let	(guṇa)
	O.B. ltše	(g.)
	M. Bur. hlya	(s.)

この母音の交替 i 系列と u 系列と関連して, Shafer は, a 母音を母音平舌化 (vowel leveling) と名付ける現象としてとらえる (平舌化とは, 口の中で, ほかの前舌または後舌は発音するとき舌がより高く上るのに比べて, a 母音は flat または level であるからだという)。これは, たとえばチベット語動詞 pr. ādebs-pa “strike” pf. btab; ādogs-pa “bind” pf. btag; gsod-pa “kill” pf. bsad. における e と a, o と a の交替をさす。以前にチベット語動詞を研究した Shafer は, この事実を, 語根母音 a から guṇa 母音 e, o になつて, 時称または命令法を示すと解釈したが, この現象は, 動詞のみに限られず, また guṇa 母音 e と o にも限られないから, ここでは, 平舌化という用語を使いたいという。つぎの例をあげる。

- Ch. 點 tem- “to light(fire)”: lao tām/
 O.B. ādzem Ch. 慙 dzām- “be ashamed”
 O.B. ādzoms Ch. 参 ts’ām- “to come together”
 O.B. kloñ “middle” Siam. klāñ

以上にあげた諸例を一見しても, Shafer の母音交替説の根拠がまったく薄弱なことはすぐにわかる。母音の平舌化などにいたつてはほとんど意味をもたない。このような主張がおよそ理にかなつていないことを示すのはむづかしくはない。第一にここでいう guṇa, vṛddhi はどのような機能をもつのだろうか, 第二に, シナ・チベット語族のコトバは, すべて i, u, e, o, と a の 5 母音しかもたないとは限らない。ここにあげている漢語にしてもビルマ語にしてもそれ以上の母音の種類をもっている。するとこの交替系列に入らない母音はどのような扱いを受けるのだろうか。第三に Shafer が再構成している共通語の母音は, *-ə=ă, *-ā *i, *-ui, *-o, *-ei, *-ai, *-au, *-wi, *-wa, *? (Chinese -ian), *? (Chinese -iau), Bur. *-o, Medial *-e-, *-ya, Chinese *iə-, *-i-, *? Final *-uk, -uñ, *-ok, -oñ, *-u-+D, -L, Medial *-a- で, まつたく体系をなさず, 基本母音とする *u や guṇa 階梯の *-e も単独では再構成母音に含まれていない。このような状態で共通語の母音交替を云々できるのだろうか。

以前に, R.A. Miller も ablaut system を考えたことがあつた (The Tibeto-Burman Ablaut System, 国際東方学会議紀要 I. 1956)。私は, その説はチベット語とビルマ語についての歴史がわからなかつたことから由来した憶測として賛同しなかつた (「チベット・ビルマ語語彙比較における問題」東方学15輯)。Shafer の本書における推測は, それよりも粗雑なものである。規則的と想定する対応関係以外の対応を示す例を単に母音交替として片付け, 形式の上での一致の

みを求める進め方には、どうしても賛同できない。Shaferはさらに形態調和変形と名付ける現象をあげる。単語形式の変形は古代チベット語で極端になつた。ここでは動詞の各位置の音素は必ずしも不変ではない。ex. āgeñs (pres.) “fill” bkañ (pf.), dgeñ (fut.), k'oñ (imp.); ādzud (pres.) “put” btsud, zud (pf.), ābyin (pres.) “take out” p'yin(pf.), dbyuñ (fut.), p'yin (imp.) では、どれが本来の初頭子音で、どれが末尾子音か。またどれが接頭辞か接尾辞か決め難い。このような交替関係は規則的な音声発展 (regular phonetic evolution)の結果であり、そのもとは「形態調和変形」にあると見做した。そして、今の段階では、チベット語におけるような形態調和変形と似たものが、ほかのシナチベット語族のコトバ、たとえば漢語にも存在したに違いないと云えるだけであるという。ビルマ語の無声無気初頭音の自動詞と無声出気初頭音の他動詞の間の交替はよく知られ、ヒマラヤの言語で自動詞の有声初頭音と他動詞の無声初頭音の交替も指摘されているとして、これも形態調和変形と考える¹⁴⁾。この主張の方は、Conrady, Wolfenden 以来強い根拠があつて、現代語においていまでもはつきりと生きている初頭音の対立関係は、共通における形態論的機能の反映として十分に認めることができる。

8. 第2章は、接頭辞にあてられる。これまでに多くの研究者が接頭辞を扱つて来た。August Conrady はチベット語における接頭辞の存在自体を問題として、漢語にももともとは同じような接頭辞があつて、それが同化して高型声調をもたらしたと主張した。声調の発生が接頭辞の消失によるというこの説は、彼にしたがつた学者に大きい影響を与え、子音接頭辞をもつたチベット語がこの語族の中でもつとも古い形態であると推測された¹⁵⁾。S.N. Wolfenden は接頭辞の機能を重視して、“subjective” m-, ā-, b- と “directive or objective” r-, l-, s-, d- g- の2つに分けた。これに対して Shafer は接頭辞の形式に重点をおいている。究極的には、意味も機能ももたない接頭辞と、分類的なあるいは機能的な接頭辞を区別できるであろうけれども、それよりもここで取り上げねばならないのは音声上の性格 (phonetics) であるから、实际的な立場 (realistic viewpoint) から問題に接近するという。この語族のいろいろの (語群) 語系を通じて同じ語根に同じ接頭辞がつけられているとすると、その接頭辞は原初的なものであり、おそらくある時期にシナ・チベット全域に拡がっていたと考えてよいことになる。またある接頭辞が同じ語根につけられていなくとも、チベット・ビルマ語派で同じ機能をもつていたとなると、曾つてはシナ・チベット全領域でも同じ機能を果していたと仮定できる根拠になる。それ故、接頭辞が安定しているか不安定であるかを検討しなければならない。しかし、どのようなときに脱落し、どのような条件下で保存されるかを決定するのは非常にむづかしく、決定的な解決に到達

することができない。そこで Shafer は接頭辞の圧縮説 (Compression theory of prefixes) を提唱する。

高性能のレーシングカーが恐いスピードでセメント壁にぶつかつたとして、そのときの車体がシナ・チベット語複音節の状態に似ているという。単語のはじめの部分が圧縮されて、チベット・ビルマ系言語の子音的な接頭辞になり、原初的な母音と子音のあるものは脱落し、接頭辞の残つた子音はよく入れ替つたが、語根はかなりそのままの状態でのこつた。

Shafer の接頭辞の研究は、上述のほかに、つぎの点により大きい特徴がある。Wolfenden は、同じ語根に別のコトバで違つた接頭辞がついていると、それはそのコトバで交換 (substitution) が起つたためだとする。私もこれに近い意見をもっているが、ただの交換ではなくて、各々のコトバで接頭辞の使い方が違つていたのだとしたい。ところが Shafer は言語間の接頭辞の相違は規則的なしかし思いがけない音声変化の結果であつて、恣意的で説明のつかないような交換の結果ではないとする。そして、そのような音声変化をさぐろうとする。しかし、本書2章であげている再構成形は、*t-, *ñ-, *m-~*p-, *r-, *k- の6形式に限られ、しかも比較の対象はクキ・チン語系のコトバが中心である。したがつて、この再構成形はクキ・チン語系の形であつて、それをシナ・チベット共通語の形式に置き換えることは許されない。たとえば、p. 22 では“8”は *t-rliat 形式をたてるが p. 21 では、漢語の pat “八”が原シナ・チベット語の接頭辞を保存し、タイ語の pyat (written Nora?), 古代チベット語 brgyad に比較できるというが、この *p- と *t- の関係については、何も説明していない。

なお、この子音接頭辞は原初の時代には母音をともなつていたに違いないが、その母音が復元できないから、ここで *t-rliat と示したのは、実際には *tV-rliat または *Vt-rliat, *VtV-rliat の意味であるという。

Conrady も Wolfenden もこれらの接頭辞は、もともと母音をもつていたと推測した。しかしチベット語の dgu “九”に、クキ・チン語で tə-ku があたるからというのでは決定的な証拠にならない。ところが Shafer はルーシャイ語と漢語が (1) *Xr- と (2) *X-r に対して、違つた音声反応 (phonetic reaction) を示すところに決定的な証拠があるとする。

- (1) O.B. k'rab- “weep” Kukish *krap, Thado kap, Luśei ʔap, Ch. k'yap
(2) O.B. d-rug “6” // *t-r²uk, ruk, luk

Xが語根の一部であれば、ルーシャイ語と漢語で音声変化が起り、Xが接頭辞であれば脱落したという¹⁶⁾。しかし事態は、このように簡単にはいかない。Shafer があげていない Thado 形 “6”を補うと、gūp-~wūp である¹⁷⁾。これは *t-r²uk と無関係であるとして置いておけるだろうか、そして、このような問題をただ “weep” と “6” の一対のみで解答できるだろうか。接頭辞が母音を

ともなっていたか否かは重要な問題ではあるけれども、接頭辞のシステムとか機能を考える上で決め手になるものではない。

ビルマ語の接頭辞には、特別の観察が必要であるという (p. 31)。このコトバにはただ *n* 接頭辞の痕跡のみが保存されているようだとし、つぎの 2 例をあげる。

**n*-yă “night” : O.Bur. *nă*, *n-yă*

**n*-loñ “stone” : O.Bur. *k-lok*

“night” を何故 *n*-ya とするのか、また何故 **n*- がビルマ語の “stone” で *k*-になるのかわからない。そのほかの接頭辞は -*r*- の前以外では脱落したという。

* <i>k</i> -hnis	“two”	M.Bur. <i>hnats</i> :	* <i>k</i> -t‘um\	“three”	M.B. <i>sum\</i>
* <i>k</i> -na	“ear”	<i>na\</i> :	* <i>k</i> - <i>r</i> -mei	“tail”	’ă-mri\
* <i>t</i> -kua\	“nine”	<i>kui\</i> :	* <i>t</i> - <i>r</i> ‘iat	“eight”	hrats
* <i>t</i> -Xwom\	“bear”	<i>wañ</i> :	* <i>m</i> -liak	“to lick”	lyak
* <i>m</i> -t‘in	“liver”	’ă-sań :	* <i>m</i> -nam	“to smell”	nam
* <i>r</i> -hmiñ	“name”	’ă-mań :			
* <i>t</i> - <i>r</i> ‘uk	“six”	<i>k’-rok</i> :	* <i>t</i> - <i>r</i> -wat	“landleech”	<i>k</i> - <i>r</i> -wat
* <i>m</i> - <i>r</i> ‘iñ	“sound”	<i>m-rań</i> :	* <i>p</i> - <i>r</i> ‘ul	“snake”	<i>m</i> - <i>r</i> -we

接頭辞は中期ビルマ語 (M.B.) であまり保存されなかつたけれども、それでも接頭辞 **t*- がビルマ語で軟口蓋閉鎖音に発展したこと (上掲 “six” と “landleech”) と接頭辞 **m*- と **p*- がビルマ語で *m*- に合一したこと (上掲 “sound” と “snake”) が推測できるという。このような解釈の当否は、ここで推定されている接頭辞の共通形式の妥当性が、まず問題になるだろう。そして Shafer のような形式の対応関係のみを求めていく仕方では、この語族の接頭辞形式をすべて説明できる共通形式の設定、しかも研究者を満足させるような音素対応通則の設定は、不可能に近い至難のわざであると思う。

9. 本書 3 章, 4 章, 5 章は、この語族の比較研究でもつとも厄介な問題、語幹の初頭子音、母音、末尾子音の再構成を扱う¹⁸⁾。3 章は、Table A1 から A23 とその説明から成り立っているが、Shafer がそこで ST. initials として再構成する子音を慣用の順列にしたがつて配列するとつぎようになる。

<i>k</i>	<i>k’</i>	<i>g</i>	<i>ŋ</i>			<i>h</i>	<i>ɣ</i>	’	<i>x</i> (?)
<i>t</i>	<i>t’</i>	<i>d</i>	<i>n</i>	<i>ts</i>	<i>ts’</i>	<i>dz</i>	<i>s</i>	<i>z</i>	<i>y</i> <i>r</i> <i>l</i>
<i>p</i>	<i>p’</i>	<i>b</i>	<i>m</i>	<i>tś</i>	<i>tś’</i>		<i>ń</i>	<i>ś</i>	<i>ź</i> <i>w</i>

この中、*x*(?) はあと (p. 56) の対照表 (summary) にあがつていないから、これ以外に 2 つの単語 “five” と “goose” について推定する primitive **n*h-とともに、Shafer がどのように考えているのかよくわからない。*x’* とするのは

Table A22

	Old Bodish	M.Bur.	Kukish	Luśei	Dimasa
“tooth”	so	swa\	*ha\	ha	ha-tai
“charcoal”	sol-ba	-swe\	*hol	-hol	……

など（ほか2語）の単語である。

シナ・チベット共通語に、上の表にあげたような単位が存在したことは推測できるが、Shaferがとつている証明は、必ずしも読者を満足させるものではない。

まず全体を通じて問題になるのは、比較されるコトバが統一されていないことであろう。Table A1 から A6 まで (ñ, ŋ, n, m, r, l)は、Old Bod., M. Bur., Luśei, Chinese, Siameseをあげる（ただし A2 には、これに Lao 語が加わる）が、A7*は、Chinese, Siamese, M. Bur., Old Bodish であり、A8 *hは Chinese, Siamese, Kukish, Luśei, M. Bur., Old Bod. を対象にする。また A9 *ɣ は Kukish, Luśei, Mikir, O. Bod., Kanauri ほか13の言語があるが、A10 *y では、Chinese, Siamese, O. Bod., Rgya., Kan., M. Bur., Katsin, Dimasa, Kukish, Luśei を扱うというようにいくつかのコトバが出没し、最後の対照表では、Chinese, Siamese, Kukish (推定形式), Luśei, Middle Burmese, Dimasa, Katsin, Old Bodish の8言語が取り上げられる。第2に、対象とするコトバのすべてに対応形をもつ例が非常に少ないことをあげねばならない。たとえば Table A1 ñ では、上に記したように Old Bod., M.Bur., Luśei, Chinese, Siamese の5言語を扱うが、この5言語のすべてに対応形式をもつ単語は、全体24語の中で“five” 唯だ一つである。4つの言語に対応形があるのは“fish”, “goose”, “silver” の3語、これに対して、2言語しか対応形をもたない単語は16語もある。これを統合して、上記5つの言語のそれぞれのñが対応し、同じ起源をもつていと云えるだろうか。同じく5言語を扱う Table A3 n も同様に、全体20語の中で、5言語に共通するのは1例、“suck, breast” のみであり、4言語に対応形があるのは“dwell” だけなのに、2言語にしか共通しない単語は10語もある。Table A4 m も5言語に共通するのは“fire” 1例で、Table A5 r および A6 l にいたっては、さらにひどい。5言語が共に対応形式をもつのは一語もない。これでは読者は、この比較の結果設定された対応通則を信頼することはできないであろう。これは、比較の方法自体に大きい欠陥があると思えない。

Shaferが音素形式の並行一致のみを追求するのあまり意味の上での対応に理解できないところが出てくるのも当然である。たとえば Table A3 n の (17) year に

O.Bod.	M.Bur.	Luśei	Chinese	Siamese
-nin	hnatś	……	年 nen-	……

の例がある。この比接は W. Simon の Tibetisch-Chinesische Wortgleichungen (1930) の (296) rnyin (alt)=nien 年 (Jahr) に由来するが、何故これが

支持されるのかわからない。チベット語形には year の意味はまつたくない。Table A2 では T.B. “nose” に Simese “face” を Old Bodish “meadow” に Siamese “field, farm” をあてる。この意味の対応はあり得ることではあるが、ここで我々はこの意味の転化を十分に納得して理解できない。

対応形式の選択には、決定的な基準をもたない場合が多いことは事実である。Table A4 m に

	Old Bod.	M. Bur.	Luŕsei	Chinese	Siam.
“fire”	me	mi\	mei	焜 xmyei	hmai\
“tail”	me	mri<*rmi	mei	尾 myei	……

の例があるが、この漢語の形式を火としないで焜としたのは、

の並行を求めたためであろう。漢語 尾, 焜, 火の上古漢語形式は Karlgren にしたがうと¹⁹⁾,

尾 *m̥iwar, 焜 *xmiwar, 火 *xwâr である。

それ故、漢語の対応形を焜とすれば “fire” と “to burn” の意味の相違を無視したことになり、“火” にあてれば、形式の相違を説明しなければならない。以前に、P. Benedict が ArC. 火 xwâr を Nung hwar “burn”, Moshang var, Garo wal, Kachin wan “fire” と比べ、この TB 形式はチベット語の h̥bar-ba ~ sbor-ba, Kanauri bar-par, Miri par “to burn” と関係するとした²⁰⁾。これにタイ語の形式 vai “fire”, hmai² “to burn” を加えて、類似の形式の間でどれとどれを共通とするかは、なお検討を必要とする。(私は「タイ語と漢語」の中で、火 xwâr : vai<vaai? を比接した (p. 39)²¹⁾)。なお、R. Shafer は p. 62 でこの xmyei, hmai は (Sino-Daic 形式) s- をともなう causative らしいといっているのはうなづける。Table A4 で “ねる” に関して、Shafer は 3 形式をあげる。

	Old. Bod.	M. Bur.	Luŕsei	Chinese	Siamese
14) sleep	……	mwe’	……	寐 mwi\	mə’əy\
27) to sleep	……	myañ\	……	眠 men- (眠の誤植)	……
17) close eyes	……	……	mai	眯 mǎi	……

このビルマ語の形式は、Judsonによると、mwei³ “to sleep, enjoy sleep”, myañ² “to be sleepy, to sleep” とある。前者の古形は muy³ である。この漢語は Karlgren によると、寐 *m̥iəd, “sleep, lie down to sleep”, 眠 *m̥iən “shut the eyes” 眯 *miər “get something in the eyes, trouble sight” とある。これも、どの形式とどの形式が対応するかの決定は、そのほか漢語の寝、臥睡とチベット語、nyal-ba; Bur. ’ip-se, Kachin yúp-’ay; Meithei tum-ba, Thado hlūm などを考慮した数種の語幹形式の設定が必要ではないだろうか²²⁾。

Table A16* t につぎの例がある。

	Ch.	Siam.	Kuki	Lušei	M. Bur.	Dim.	Katsin	O. Bod.
12) water	?	tui	we	di	mă-di
13) egg	?	tui	-di	di
14) sweet	*tui	tui	-di	dui

(M.Bur. = “to flow” Katsin = “to moisten”)

この対応関係は3語がほぼ並行しているところに意味があるが、この対照から共通形式が *t- であつたと証明できるだろうか。何故、漢語の水 *śiwər*, チベット語の *chu* がこの対応系列に入らず、ビルマ語の *riy* “水” に替つて *we* などが加えられるのだろうか？ チベット語の *thul* “egg” (ビルマ語の *u³*) も明らかにルーシャイ語の *tui* と関係しているのに、ここに加えないのは、チベット語形式を Shafer のいう形態調和変形と考えるためだろうか。

このように広範囲にわたる語群間に単語をつかまえ、その対応関係にある指標たとえばこの *t- によつてまとめてみても、各処に詳細なしかももつとも見逃さない関係を見逃しては、この研究は、これらのコトバの親族関係の解明に、さほど大きい証明力をもたないことになるであろう。

同じように Table A17* p のもとに

	Ch.	S.	K.	L.	M.B.	Dim.	Ka.	O.B.
15) wind, air	風 puñ-	...	*mV-puñ	m'buñ	...

と一見よく似た3つの形式を並べてみても、“風”の共通形式の証明にはならない。これにあたるタイ語 lom, チベット語 rlun, ビルマ語 liy, ルーシャイ語 thlii が、これとどのような関係にあるのか明らかにされて、この単語の同源関係が立証されるものと思う。かりに各言語の形式間の関係を図示するとつぎのようになる。

*plum→ArC.	風	pjüm>piuŋ(平)	: Kachin	Npùn	: Bur.	liy
↘Tai	lom	L1	Tibetan	rluŋ	: Lushei	thlii
			Nung	(nām-) bing		
			Meithei	nuŋ(-sit)		

いま一つ、Table A3 にあげる単語

	Old Bod.	M. Bur.	Lušei	Chinese	Siamese
“suck, breast”	nu-	nui'	hnu	乳 nyū/	hnū\ (Lao)

の改訂を示してみよう。

	Tibetan	Ancient Burmese	Lushei
nu-ma “female breast” nipple	: nuw ³	“femal breast” nipple	: hnù-těe “breast”
nu-ba “to suck”	: nwaa ² nuw ³	“milk”	: bōŋ hnù-těe “milk”
	: tšw ³	“to suck”	: dùut “to suck”

Meithei	Thado	Tai Common	Arch.
khom “breast”	: noi	: nom L1	: 乳 <i>ńju</i> “nipple”
saŋ-gom “milk”	: noitui	: nam L3-nom L1	: 乳 <i>ńju</i> “milk”
chuppa “to suck”	: chep	: suup	: 吸 <i>xjəp</i> “inhale”

このような比較をするならば、この意味分野には、“乳房、乳首”と“吸う”に関連するチベット語のタイプと“乳房、乳首”が“乳”と関連するビルマ語、ルーシャイ語、メイタイ語、タド語、タイ語のタイプがあることがわかる。

10. Shafer が4章で再構成する母音は、さきにあげたが (p. 018) これについても初頭子音と同じことを指摘できる。いま、同一語幹の単語が違つた対応語をもつて2ヶ所で取上げられている例をあげよう。

Table 4 Final *-ui と、Table 9 Final *-wi で

	Old Bod.	M. Bur.	Luśei	Chinese	Siamese
8) rat	byiu	...	-zu	鼯 <i>ĩü</i>	... (p. 59)
		W. Himal.	M. Bur.	Luśei	Chinese
2) rat	byi-ba	...	pwe	bui	蝙蝠 <i>pwen</i> (p. 64)

チベット語の“ねずみ”が漢語の“いたち”と“こうもり”にあたる。byiu は byi-ba の diminutive 形式 byi-u であるから、漢語の鼯は蝙蝠の diminutive と解釈するのだろうか。byi-ba の古形式は byu-ba であつて、漢語の鼠 *śio* に対応する。Shafer が byi-ba に蝙蝠をあてたのは、おそらく “dog” *khyi*; 犬 *k'wen* と形の上での並行を求めたためであろう。

11. 5章末尾子音では、Table 23 Final *-r, Table 24 Final *-l, Table 25 Final *-s を推定し、3つの対応原則をあげる。

	Old Bod.	M. Bur.	Luśei	Chinese	Siamese
23) *-r	r	○	r	n	n
24) *-l	l	○	l	n	n
			Katśin		
25) *-s	s	○	t	i	○

この中、Table 25 の Siamese 対応形は一例

	Old Bod.	M. Bur.	Katśin	Luśei	Chinese	Siamese
14) ladder	skras-ka	krə'-tai

からの結論であるが、kradaj の kra- は実は接頭辞であり、チベット語 skraspa とは何の関係ももたない。Table 23 に同じ意味をもつ2つの対応例がある。

	Old Bod.	M.B.	Luśei	Chinese	Siamese
8) to fly	āp'ir-ba(gtsang)	in

10) to fly p'ur 奮 pün

このチベット語 hphir-ba と phur は同一単語の方言的な変形にすぎない。そして何故 phur に飛 piwər をあてないで、奮をあてるのだろうか、またタイ語の Bin が漢語の飛に対応するとしただけなのだろうか²⁴⁾。

Table 24 につぎの2単語があげられる。

	Old Bod.	M.B.	Luśei	Chinese	Siamese
5) to wash	bsil-ba	sil	洗(sen/)
6) thread	t'il	線 sīn\

チベット語の bsil-ba は、もともと “to be cool” の意味で、それが hkhurd-pa “to wash” の敬語として使われた。ところが “thread” のチベット語形は skud-pa < *s-khud-pa であるから、ビルマ語、メイティ語共にこの2単語は、漢語と並行することになる。

	Tibetan	Ancient Burmese	Meithei	ArC.
“to wash”	<u>hkhurd-pa</u>	khyu ² -se	su-ba	洗 *siər
“thread”	<u>skud-pa</u> < s-khud-pa	khrañ	(lag)-suñ	糸 *siəg 線 *sian

ビルマ語の “洗う” は “洗う” 対象によつてつぎの形に分割される。riy khyu²-se/jei chóu-de/ “身体を洗う”, sac-se/sitte/ “顔を洗う”, hlyo-se/šo-de/ “衣服や髪を洗う”, tshiy²-se/shéi-de/ “(水で)きれいにする”。もし、漢語の洗がビルマ語の tshiy² もしくは sac- に対応するのなら、洗はチベット語の hkhurd-pa にはあたらな。何故なら hkhurd-pa がビルマ語の khyu- に対応するのが確実であるから。しかし、事実、この単語は “thread” と並行するからそうとも考えられない。ここに対応形を決定する厄介さがある。Table 24 の対応形は Shafer が初頭音の一致のみに基準をおいた結果であろう。(W.Simonはチベット語 hkhurd-pa に漢語概 kjei をあてる)。

Wolfenden は、末尾子音の変形とくに漢語とチベット語の dental final を問題にし²⁵⁾、さらにそれを拡張して、チベット語、カチン語、漢語の単語族を取り上げて末尾子音の性格を云々した²⁶⁾。そして、チベット語、マル語、カチン語などの比較からビルマ語形に末尾子音を複元しようとした論旨もすぐれていた²⁷⁾。Shafer がこの書物で進めている方向は明らかにそれとは異質のものである。

Shafer は、これまでに Lolo グループの言語とクキ・チン諸語の研究に力を注いで来た。ロロ語についての *Phonétique historique des langues lolo* (TP. Vol. XLI 1952) は、この方面の労作であり、さきにあげたクキ・チン語に関する数篇の論文も未開の分野を開拓した。たしかに、これらの研究はたとえば Wolfenden の *Outline of Tibeto-Burman Linguistic Morphology* (1929) をはじめとする業績の上に多くをつけ加えただろう。しかし、Wolfenden はコト

バの枠の比較に努力したのに対して、Shafer はあくまで “phonetic equation” を求めることに始終した。さらに遠慮なしに云うならば、とくに本書の3章、4章、5章に見られるような極めて大雑把な研究の時代はもはや過ぎ去ろうとしているのではないだろうか。今はすでに、対象とするコトバをもつとよく把握した細心な研究段階に入りつつあるのではないか。

この書物のような広範囲にわたった比較研究では、上にいくつかの例をあげたように、どこそこがよくないとか、たとえばA語のどの単語形式が誤っていると、対応のさせ方がよろしくないとか否定しても決定的な批判にはならない。部分的な批判がたとえ当を得ているにしても、この書物はなお十分存在価値をもつだろう。そして、シナ・チベット諸語の比較研究の歴史の中で、Conrady, Wolfenden, Karlgren とともに一つの時期を劃することは疑いが無い。しかし、もしこの著者が試みている範囲で、別の研究者がより豊富な資料と堅実な方法をもつて、別の成果を公刊するならば、この書物は全般的に批判されたことになるだろう。そこでこの分野の研究は大きく進展するに違いない。

本書第3、4分冊を期待したい。

(Robert SHAFER: Introduction to Sino-Tibetan part 1. i-vii., pp. 1—120. 1966, part 2 pp. 121—216. 1967. Otto Harrassowitz. Wiesbaden.)

註

- 1) たとえば E.J.A. Henderson: The topography of certain phonetic and morphological characteristics of South East Asian languages, *Indo-Pacific Linguistic Studies* Part II. 1965. pp. 400—(Lingua 15) は十分に参考になる。
- 2) Roerich G.: Modern Tibetan Phonetics with special reference to the dialects of Central Tibet: JASB XXVII 1931
- 3) Uray G.: Kelet-Tibet nyelvjárásainak osztályozása (The classification of the dialects of Eastern Tibet) Budapest. 1949.: review of Hermanns, M.: Tibetische Dialekte: Acta Orientalia Hungaricae Tom IV. 1955.
- 4) 瞿霭堂: 藏語概況, 「中国語文」1963/3
- 5) R.A. Miller: Segmental Diachronic Phonology of a Ladakh (Tibetan) dialect. ZDMG. 106 1956.
- 6) Róna-Tas: *Tibeto-Mongolica, The Tibetan loanwords of Monguor and the development of the archaic Tibetan dialects*, The Hague 1966
- 7) Shafer は原文の表記法を改めて使っているが、筆者の資料を用いる場合は原文の表記に忠実にしたがった。
- 8) 拙文「チベット言語学における二、三の問題」『日本西蔵学会会報第十一号』

1964.

- 9) たとえば “to learn” slob-pa: Balt. lza-ba “to overturn” zlog-pa: Balt. lzoq-pa, “month” zla-ba: Balt. lza etc. がある。
- 10) たとえば “bridle” srab: Balt. strab: Purig strap, “sister” sriṅ-mo: Balt. string-mo, “worm” srin-bu: Balt. strin, “kingdom” rgya srid: Balt. rgya strid etc. がある。
- 11) つぎの例も、この西部2方言を特徴づける特異な対応である。

	Wr.T.	Balt.	Purig
“to sweet”	rṅul	: khmul-chhu	: shmul
“silver”	dṅul	: khmul	: shmul

- 12) A.H. Francke: Vokabular der Manchad Sprache, Lahul (Himalaya) ZDMG 71 1917.
- 13) ビルマ・ロロ語系の代表言語の一つであるリス語にも、同系言語に対応する形に替つて、チベット語によくあたる形をもっている例がある。cf. 拙稿「リス語の比較研究(続)」『東南アジア研究』6巻2号1968.
- 14) cf. 拙稿「シナ・チベット諸語比較研究略史Ⅰ」アジア・アフリカ文献調査報告53冊, 1964.
- 15) 接頭辞の消失と声調の発生との関係は、チベット語自体について証明できる。拙文「チベット語とビルマ語におけるトネームの対応について」『言語研究』34 pp. 90—95
- 16) 接頭辞の中には、その起源を推測できるものがあるとして, Shafer はチベット語の数詞につく接頭辞をつぎのように解釈する。(p. 21)
- g-tśig 1, g-nyis 2, g-sum 3, b-zi 4, lña<*b-l-ña 5, d-rug 6, b-dun 7, b-rgyad 8, d-gu 9, b-tśu 10.
- はじめの3つの数詞は原初の時代には、接頭辞をもたなかつた。このチベット語の g- は形容詞構成の *kv- をとどめているのである。“6”と“9”をあらわす単語の d- は、多くのチベット・ビルマ言語で dental stop にはじまる“1”にあたる単語の痕跡である。d-rug “6”は“もう一方の手に一つ”“もう一方の手の first finger”の意味で、d-gu “9”は“(指)全体から一つ”を意味した。b-l-ña “5”と、b-tśu “10”の b- は“all”の意味をもつた単語の痕跡である。“一方の手の全部”“両方の手全部”から来ている。
- 17) T.C. Hodson, *Thādo grammar*. Shillong 1905 による。
- 18) この3つの章は, The initials of Sino-Tibetan. JAOS 70 (1950), Problems in Sino-Tibetan phonetics JAOS 64 (1944), The vocalism of Sino-Tibetan. JAOS 60 (1940), 61 (1941) の改訂である。しかし、説明はこれらの論文の方がくわしい。

- 19) 以下上古漢語形は, *Grammata Serica Recensa* による。Shafer は Karlgren の中古漢語音を修正して使っている。
- 20) P.K. Benedict: *Archaic Chinese *g and *d*. H.J.A.S. Vol. 11. 1948.
- 21) 『高橋先生還暦記念東洋学論集』所収, 関西大学東西学術研究所1960, 1967.
- 22) 以下, カチン語は拙稿「カチン語の研究」『言語研究』38号1960により, Meithei 語は, W. Pettigrew: *A Dictionary in English, Bengali and Manipuri*. Second edition (revised) Calcutta, 1896 による。
- 23) ルーシャイ語は W. Bright: *An English-Lushai word list* による。この資料は R.A. Miller 教授の御好意で見ることが出来た。なお, W. Bright *Alternations in Lushai*, *Indian Linguistics* 18. 1957 と Bernot: *Les khyang des collines de Chittagong* (*Pakistan Oriental*) の Review (*Language* Vol. 36. 1960) は有用である。
- 24) ビルマ語の pjám-de は, ビス語 pjám-ŋs, リス語 vœh-'ah, ラフン語 puh-ve, カチン語 pyèn-'ay の対応形をもつが, これはチベット語の bya “とり, 雞” にあたるのではないかと私は推測する。別の系統の語形として, Nung 語 dam, Maru 語 tòŋ, Lashi 語 tàn “to fly” がある。この方は, “wing” と関係する。(Nung 語は J.T.O. Barnard: *A Handbook of the Rawang dialect of the Nung language*, Rangoon, 1934. に, Maru. Lashi 語は私の資料による)
- 25) S.N. Wolfenden: *On certain alternations between dental finals in Tibetan and Chinese*, *JRAS*. 1936.
- 26) *Concerning the variation of final consonants in the word families of Tibetan, Kachin and Chinese*. *JRAS* 1937.
- 27) *On the restitution of final consonants in certain word types of Burmese*. *Acta Orientalia* XVII. 1938.

補註1

バルティー語については, ロンドン大学の R. K. Sprigg 氏が発表したつぎの2つの論文が十分参考になる。

Lepcha and Balti Tibetan: Tonal or Non-Tonal Languages ? *AM*. vol. XII. Pt. 2 1966

Balti-Tibetan Verb Syllable Finals, and Prosodic Analysis, *AM*. vol. XIII. Pt. 1-2 1967